

チャーホフと鉄道、およびその後の駅での書籍販売

大平陽一

アントン・チャーホフ(1860-1904)はロシアで鉄道網が発達した（ロシアにおける第二の鉄道付設ブームとされる）時期に活躍した作家なので、作品のなかに鉄道がよく登場します。すぐに思いつくだけでも、『恋について』(1897)や『犬を連れて奥さん』(1899)といった代表作では不倫のカップルの別れの場面が列車の中で描かれていますし、『ともしび』(1888)は鉄道技師のひとり語り

『恋について』

「わたしは最後にもう一度キスして、手を握りしめ、そして二人は別れたのです。永遠にね。汽車はもう動いていました。私は隣の個室に坐って——そこは空いていたのです——次の駅までそこに坐って泣いていました。それから、歩いてこのソフィーノへ帰ってきたんですよ……」

全集の目次をながめても、『車内風景』(1881)、『駅長』(1883)、『車中で』(1885)、『実際、乗客というものは！』(1885)、『一等車の客』(1886)といった題名が並んでいます。短編小説『わるもの』(1885)では、釣りの錘にするために線路の留めねじをはずすけれど、「全部はずしゃしない……ちゃんと残して」転覆事故が起こらないようにする無学な農民が、裁判で予審判事を手玉にとって笑わせます。

『わるもの』

「もっとこっちへ来て、私の質問に答えろ。この七月七日の朝、線路番のイワン・セミョーフ・アキフォフが、線路を巡回中、百四十一キロの里程標のあたりで、お前がレールを枕木に止めている留めねじをはずしているのを見つけた。これがその留めねじだ！……線路番はその留めねじを持っているお前を取りおさえた。それに相違ないな？」

「なんで？」

「アキフォフの申し立てた通りに相違ないかと言うんだ？」

「その通りだよ」

「よし。それじゃ何のためにお前は留めねじをはずしたんだ？」

〈略〉

「だって、旦那、錘なしでそうしてやれますんで？小魚やうじ虫を針につけて放り込んだって、錘なしで底へ落ちていくかね？」

またチャーホフ作品には、『別荘住まいの女』(1884)、『別荘の人々』(1885)、『別荘で』(1886)やあるいは『浮気な女』(1892)のように別荘を舞台にした作品も多いのですが、モスクワ市民が別荘生活を楽しむようになったのも、鉄道網の普及と無関係ではありません。そのことは、日本でも劇《民芸》の上演でおなじみの戯曲（若い人たちには吉田秋生の漫画や大島優子主演の映画でその名をご存知かもしれない）『桜の園』の次の台詞を読んでもいただければ、お分かりいただけるでしょう。

『桜の園』

「あなたの領地は、町からわずか五里のところであって、しかもついそばを鉄道が開通しました。でもし、この桜の園と川沿いの土地一帯を、別荘向きの地所に分割して、それを別荘人種に貸すとしたら、あなたはいくら内輪に見積もっても、年に二万五千の収入をおあげになれるわけです」

しかし、チャーホフと鉄道の結びつきは、ただ単に作品の中に鉄道が登場するというだけではありませんでした。チャーホフの作品を数多く出版し、彼を有名にしたアレクセイ・スヴォーリンは、600にのぼる駅に書籍雑誌のキオスクを設け、380万部の「廉価文庫」を売ったことで成功した出版人でした。プーシキン、トルストイ、ドストエフスキーといった古典が広く読まれるようになったのは、実は車中の読書のために出版された「廉価文庫」「鉄道文庫」のお陰でした。立派な装丁の高価な全集は、作品の普及のためには不向きだったのです。そのあたりの事情は、カナダ在住のナボコフ研究者の著書から引いた次の一節にうかがえます。

「車中の読書には、軽い恋愛小説やユーモア小説（大衆商業文学）か、あるいはカラフルな表紙の雑誌が相応しいとされるようになった。たとえ、古典文学や純文学を読むにしても、読み終えれば座席に捨てていけるような廉価版——鉄道文庫などと名づけられもっぱら駅のキオスクで販売された廉価版を読むものとされた」

駅に本屋を設けるというアイディアは、もちろん発展途上国ロシアの出版人スヴォーリンによるものではなく、鉄道発祥の地イギリスに起源がありました。駅の本屋が生まれた経緯については、ドイツの歴史家シュヴェルブシュの名著『鉄道旅行の歴史』に次のように述べられています。

「鉄道の発達はあらゆる種類の書籍の購買を刺激した。1848年までは、駅構内で書籍や新聞を旅行者に供給する試みはなかった。この年に、W・H・スミスが、バーミンガム線で書籍や新聞を専売する許可を得た。彼の最初の店は、ユーストン駅構内にあった。その後まもなく、彼はロンドンを中心とした全路線と北西線でも、同様の許可を手に入れた。1849年には、パディントン（ロンドン駅）の駅構内書店には、千冊の書籍が置かれていたが、主に小説類だった。1ペニーの手数料で旅行者は、列車が到着するのを待つ間、店に入ることができ、降りた駅でそれを返却すればよかった。ロンドンの出版者ルートリッジは、《鉄道文庫》なるものを始め、クーパー、ジェイムズ、ホーソン、ジェイムズ・グラント、デュマ、その他の小説家のものを次々に出版した。マレーは、『有益な情報と無害な娯楽作品』と銘打った《旅行用文学》シリーズを出した」

マレー社は、ダーウィンの『種の起源』(1859)を出版したことよりも、むしろ本格的旅行ガイドブックを創始した出版社として有名なのですが、今では2種類の日本語訳が出ているウォルター・ウェストン(1861-1940)の『日本アルプスの登山と探検』もマレーから出版された本です。

フランスでも大手出版社アシェットが、駅に本の売店を設けたことで成功をおさめました。次に引用する小倉孝誠『〈パリの秘密〉の社会史』の一節を読んで下さい。

「アシェット社は、鉄道駅を書籍販売のためのスポットにするという着想を持った。1852年にまず北部鉄道の駅で営業権を獲得し、やがて他の鉄道会社の駅でも同じように販売しはじめた。翌年には「鉄道文庫」と名づけられたシリーズまで売り出す。赤い表紙は、旅行案内書、青い表紙は農工業関係の書籍、緑色の本や歴史書と紀行文、クリーム色の表紙はフランス文学、そして黄色い表紙は外国文学と様々な分野に分かれ、フランス文学にはビクトル・ユゴーやジョルジュ・サンドのような有名作家の作品も含まれていた。アシェットは、車中で無為を強いられる乗客の潜在的欲求に応えようとしたのである。」

鉄道と近代的旅行業の創始者トーマス・クック、世界初のロンドン万国博覧会と鉄道、さまざまな形で文化と鉄道は結びついています。とりわけ、19世紀後半から20世紀初頭のメディア革命にとって鉄道の果たした役割は絶大なるものがあります。世界で最初の映画が『列車の到着』だったのは、偶然ではありません。ロシアで映画という新メディアが広く知られるようになるにあたっては、ニージニイ・ノヴゴロドの博覧会が大きな役割を果たしたのですが、この博覧会の見物客のために、鉄道会社は割引切符を発売していたと言います。

(吉田英生との私信：2015年2月13～14日)